

歯科治療後に PTSD の診断を受けた 軽度発達障害児の一症例

○石倉行男・志岐晶子・西崎智子・緒方克也

おがた小児歯科医院（福岡）

緒言

PTSD とは、突然の衝撃的出来事を経験することによって生じる特徴的な精神障害である。今回、歯科治療後に PTSD の診断を受けた軽度発達障害児の一例を経験したので報告する。

症例

患者：9歳8ヶ月，女児（初診時）
現病歴：幼少時に近医にて抑制下で歯科治療を数回受け、6歳時に治療終了後パニックを起こした。その頃から、日常生活でも、歩くときは飛び跳ねるように歩く、大声で叫んだり、暴れたりするようになった。吐気も著しくなり、某大学病院心療内科を受診し、PTSD の診断を受けた。その後、これらの症状は少しずつ緩和したが、友達との関係がうまくいかない、日常生活の随所で幼児性がみられるなどの問題を抱えている。今回、むし歯を主訴として当院を受診した。

経過

2006年3月27日：患者面接、口腔内診査等

2006年3月31日：発達検査

2006年5月22日：全身麻酔下集中歯科治療

考察

当初、児の問題行動は PTSD によるものであると考えられていた。しかし、発達上なんらかの問題点を持つものと考え、当院発達保育科にて発達検査を実施した結果、言語性 IQ71，動作性 IQ69，全検査 IQ67 で、知的発達は境界線付近であり、発達全体に軽度の遅れを持つものと判断した。今回の症例において、軽度発達障害の児に発達の問題を考慮せず歯科治療を行うと、患児は治療の意味を十分理解できずに PTSD になりやすいということが示唆された。

当センター歯科における全身麻酔下歯科治療の実態調査

○尾崎みずほ 武田康男

北九州市立総合療育センター歯科

【緒言】

当センターの全身麻酔下での歯科治療の実態調査を行い、重複項目については過去のデータと比較し、傾向などについて検討した。

【方法】

平成13年度から17年度の5年間に当科にて全身麻酔を受けた632例427名の処置記録などをもとに調査を行った。また、過去のデータとは、昭和59年7月より昭和62年3月までに全身麻酔下での治療を行った198名のデータである。

【結果】

男女別患者数：男性266人、女性161人
処置年齢別件数割合：12歳未満は40%（うち6歳未満が22.3%）、18歳以上が41.1%と、過去と比べ処置時年齢層が高くなっていった。
術中の中止・中断症例：632例中16例で、うち5例は本調査期間中に再度全麻を行った。治療開始前の中止は16例中8例であった。
障害の内訳：発育発達障害が最も多く、次いで後遺症群、と過去と同じ傾向であった。
処置歯数：永久歯6106本、乳歯3269本であった。過去と同様、術後も何らかの外来処置が必要な症例が多数存在した。
症例別の麻酔時間・処置時間：ともに過去のデータと比べ、長くなる傾向が認められた。
処置内容別件数：過去と比べ、外科処置よりも保存・補綴処置件数が多くなっていった。

【考察】

約20年前のデータと比べ、明らかに高い年齢層での全麻症例が増えており、処置内容や所要時間も変化してきていることがわかった。今後もこの傾向は続くことが予想され、より一層の外来での予防や、低年齢からの指導が必要となってくることが示唆された。